

近世宿場町における地割の継承と変化

— 岡山県矢掛町旧矢掛宿を事例に —

はじめに 奈文研では、2017年度に、岡山県小田郡矢掛町に所在する旧矢掛宿において、町並み調査を実施した。旧矢掛宿については、昭和62年（1987）に伝統的建造物群保存対策調査がおこなわれているが¹⁾、再度、現況の把握をおこなったものである。矢掛町は倉敷市の北西に位置し、旧矢掛宿は矢掛町の中央、小田川沿いに位置する。周辺には古代山陽道が通り、中世には船路が開通した。近世以後は水陸交通の要所として、西国街道に面して発展した宿場町である（図48）。

絵図史料にみる伝統的な地割 矢掛宿を描いた現存最古の絵図に「矢掛宿地子御免間数并絵図」（図49、『石井家文書』所収、個人蔵、元禄2年（1689）、以下「元禄絵図」とする）がある。街路や水路、堤が描かれ、伝馬役屋敷の範囲、表間口、屋敷高、所有者がわかる。また西国街道北側の屋敷地背面側から流れて、宿の東端で南北に西国街道を横断する「悪水溝」と呼ばれる水路が現在と同位置に確認できる。当初は、この悪水溝を境に、東西で町場と宿外が明確に分節されていた。次に、明治時代の地積図として「宅地田畑絵図」（図50、『石井家文書』所収、個人蔵、明治12年（1879））がある。宿東端を含めた周辺部にも宅地が描かれ、17世紀後半よりも町場の範囲拡大が読み取れる。一方で、宿中央と西端部では、敷地の統合・分割があるものの、17世紀後半の地割をよくとどめ、現代まで継承されていることが確認できる。

水路・石積の現況 宿内の伝統的な水路には、先述の悪水溝のほかに、町家の敷地境の雨落溝が挙げられる。悪水溝は旧西国街道北側の屋敷地背面側では昭和20～30



図48 矢掛宿の町並み

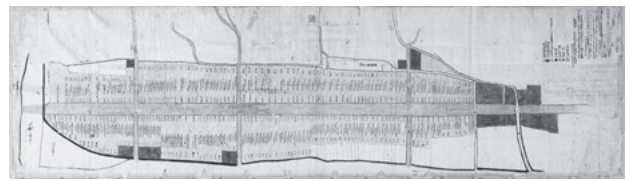


図49 「矢掛宿地子御免間数并絵図」（図右から2本目の南北線が悪水溝）



図50 「宅地田畑絵図」

年代に改修されたとみられるが、そのほかはかつての位置をとどめ、多くに伝統的な石積を残している。また敷地境の雨落溝は、建物基礎として設けられた切石どうしの中にあり、伝統的な地割を表象するものといえる。

敷地利用と石積との関係 宿南側を流れる小田川の堤防上には、昭和47年（1972）に開通した矢掛バイパスが走る。矢掛バイパスに面する建物には、石積を備えてバイパスと同高とするものが多く（図51）、これは明治26年（1893）の小田川の氾濫と大正10年（1921）から昭和27年（1952）におこなわれた堤防の大改修に関連する。特に石積を備えた建物には、昭和前期頃のものも多く、旧西国街道南側の敷地利用の変遷と石積とに相関関係がうかがえる。

（福嶋啓人）

妻入と平入の混在 旧矢掛宿における町並みの大きな特徴は、妻入、平入の町家の混在にある。伝統的町家の形式調査を実施した158件のうち、妻入は84件、平入は73件、その他は1件であり、妻入、平入の町家は同等数分布していた。町家の建設年代別にみても、その軒数に偏向はみられない。

一方、間口別にみると、3間未満では80%近くが妻入であり、反対に4間以上では80%以上が平入であった。3～4間においては、妻入、平入とも同等数である（表6）。旧矢掛宿の敷地は、街道に面して短冊状に並び、その形状は間口に対して奥行が非常に深い。こうした敷地に、平入で屋根を架けた場合、必要以上に棟位置が高



図51 高い石垣を備えてバイパスと同高に建つ建物

表6 妻入・平入町家の間口別軒数

間口(A)	妻入		平入	
	通り名	軒数	通り名	軒数
A < 3間	西国街道	36	山陽道	8
	旧松山街道	3	旧松山街道	6
	その他	3	その他	1
	小計	42	小計	15
3間 ≤ A < 4間	西国街道	26	山陽道	14
	旧松山街道	6	旧松山街道	6
	その他	2	その他	3
	小計	34	小計	23
4間 ≤ A	西国街道	4	山陽道	23
	旧松山街道	4	旧松山街道	10
	その他	0	その他	2
	小計	8	小計	35
合計	84	合計	73	

